楊貴妃と熊野信仰

―中世の熊野信仰の正体に関する仮説―

蓑　虫

はじめに

二〇一一年の五月、筆者は、中国の切り絵展に招かれ、楊貴妃の墓に案内されることがあった。

筆者はそこで、この楊貴妃の墓には、遺体は埋まっておらず、楊貴妃は日本に渡り、熊野の山中に隠れたと話を聞いたのである。

この時いただいた『剪紙図説　武則天　楊貴妃　孔正一主編、韓靖作』[1]から、一部、文章を抜粋する。

「孝謙女皇很同情楊貴妃的遭遇、并設宴招待、給予优厚的待遇。楊貴妃此后被安居在和歌山的熊野、这里是皇家避暑胜地、風景优美、有〝蓬莱〟之称。」

訳文

「孝謙女皇は、楊貴妃の境遇に同情をされ、宴を設けてもてなし、手厚く遇した。その後、楊貴妃は和歌山の熊野で暮らした。そこは、皇家の避暑地であり、風景明媚で、“蓬莱”と呼ばれていた。」

熊野が天皇家の避暑地であったかどうかはともかく、紀伊半島南部が古くから皇家の避暑地であったことは、『日本書紀』にも記されている[2]。孝謙天皇の祖父である文武天皇は牟呂の湯に行幸し[3]、孝謙天皇自身も称徳天皇として重祚した折に、紀伊国に行幸している[4]事が『続日本紀』に見える。

また、熊野が蓬莱と呼ばれてきた事は、徐福伝説と関連して、古来より数多くの研究がある[5]。

こういう事は、中国では、広く知られている話であるらしい。例えば、三泰都市官報のサイト[6]によれば、陝西师范大学の王双怀教授の話として、

「后来几经周折、结识了日本遣唐使藤原、又随藤原漂洋过海、在日本奈良附近的和歌山一带住下、还曾受到孝谦女皇的接见。」

訳文

「紆余曲折の後、日本の遣唐使の藤原と出合い、藤原に随って海を渡り、日本の奈良近郊の和歌山に居住して、孝謙女皇の接見を受けた。」

と紹介されている。

しかし、なぜ、中国では楊貴妃が熊野に来たと言われているのであろうか？・・・そして、逆に、何故、熊野において、楊貴妃が来たと言われていないのであろうか？実に不思議である。

筆者は、その楊貴妃の熊野渡来説の源流を探って見たい。

一　中国における楊貴妃の生存説

中国において、楊貴妃が熊野に隠れ住んだと言われている背景には、楊貴妃の生存説が深く関係している。

『紅楼夢』研究の大家として知られる兪平伯氏は、『長恨歌』を研究し、そこに楊貴妃の生存説がある事を指摘している。[7]

白居易は、自ら『長恨歌』を書くとともに、友人である陳鴻に小説『長恨歌傳』を書かせた。そのあとがきに次のようにある。

「質夫挙酒於楽天前曰「夫希代之事、非遇出之才潤色之、則与時消没、不聞于世。楽天、深於詩、多於情者也。試為歌之。如何。」楽天因為長恨歌。意者、不但感其事、亦欲懲尤物、窒乱階、垂於将来者也。歌既成、使鴻伝焉。世所不聞者、予非開元遺民、不得知。世所知者、有《玄宗本紀》在。今但伝《長恨歌》云尓。」

訳文

「質夫は白楽天の前に酒を挙げて言った。「そもそも、世間で稀なことというのは、不世出の才子が、これに彩色を施さなければ、結果として時と共に消え去り、世間で聞くことはなくなってしまうものだ。楽天よ、お前は、詩に深い才能を持ち、情も深い。どうか、試しにこれを歌にしてくれないものだろうか？」白楽天は、そこで長恨歌を作った。これは、その事件に感動させるだけではなく、美人を欲することを懲らしめ、騒乱を防ぎ、将来の人に教訓を垂れるものとなるだろう。歌が出来上がると、さらにこれを陳鴻に伝えさせた。世に聞こえていないことは、私は開元の遺民ではないので知ることは出来ない。世に知られていることは、『玄宗本紀』にある。（知られていないことは）今は、ただ、『長恨歌』によって伝えるよりないのである。」

元和元年（806）冬十二月白居易（白楽天）、陳鴻、王質夫の3人は、楊貴妃の亡くなった馬嵬坂の近くにある仙遊寺に遊びに行く事があった。そこで、話題が玄宗皇帝と楊貴妃の話になり、出た言葉が、先に抜き書きした部分なのである。

すなわち、楊貴妃の物語には、世に知られていない部分があり、それを伝える為に、白居易は『長恨歌』を書いたと表明しているのだ。

『長恨歌』は、言うまでもなく楊貴妃と玄宗皇帝の愛を描いた長編の詩である。しかし、その構成には、極めて不可思議な部分がある。

長恨歌の前半部分で、白居易は楊貴妃の死を描いている。ところが、後半部分では、死んだはずの楊貴妃が、仙女として蓬莱に暮らしており、玄宗皇帝の使いとしてやってきた方士に、玄宗皇帝との誓いの言葉を伝えるという筋書きなのである。

中国では、この蓬莱を日本の事だとして楊貴妃が日本に渡ったと言っているのだ。

先に述べたように、熊野を蓬莱ということもあるから、そこから、楊貴妃が熊野に隠れ棲んだと言っているのであろう。

楊貴妃の生存説が生まれた背景はこれだけではない。

記録では、楊貴妃は縊殺され、紫の褥に包まれて、馬嵬坂に慌ただしく埋められた。玄宗上皇はこれを哀しみ、1年半後、楊貴妃の改葬を行った。しかし、その時、楊貴妃の遺骸は消失していたという。

『旧唐書』の『列伝、后妃伝』には、次のようにある。

「上皇密令中使改葬于他所。初瘞时以紫褥裹之、肌肤已坏、而香囊仍在。内官以献、上皇视之凄惋、乃令图其形于别殿、朝夕视之。」

訳文

「上皇は、密かに中使に命じて（楊貴妃の墓を）他所に改葬させた。初め瘞めた時には、紫の褥を以て之を裹んだのだが、肉も皮も、すでに壊れてなく、香嚢のみがなお残っていた。内官は、（香嚢を）以て（玄宗に）献じた。上皇は之を視て嘆き悲しんだ。乃ち、その形（楊貴妃）を別殿に描かせ、朝夕、之を視ていた。」

注　中国語で肌は肉を現す

また、『新唐書』の『后妃伝』には、次のようにある。

「密遣中使者具棺槨它葬焉。啓瘞、故香囊猶在、中人以献、帝視之、悽感流涕、命工貌妃於別殿、朝夕往、必為鰍欷。」

訳文

「密かに中使者を遣わし（楊貴妃を）葬った所に棺槨を具えさせた。瘞めた所には、ただ、香嚢のみがあっただけだったので、中人は、是をもって（帝に）献じた。帝は之を視て、凄まじく涙を流し、別殿に妃の容貌を描かせ、朝夕そこに行くと、必ずすすり泣いた。」

ある人は、『旧唐書』の「肉も皮も、すでに壊れてなく」という記述は、白骨化した遺体が残っていた事を示すものだと

いう。果たしてそうだろうか？

まず、地上に放り離しの遺体ならともかく、地中に埋めた遺体、しかも、褥に包んだ遺体が、1年半程度で白骨化するものではない。そして、楊貴妃を裸にして埋めたわけでもないだろうに、衣装や装身具も残っていないのはどうしてだろう？まして、楊貴妃の身体がドロドロに溶けていたのだとすれば、そんなところにあった香嚢を上皇に捧げるとは考えられない。そして、何より、楊貴妃の墓は、今でも馬嵬の地に小さな塚としてあり、これは、何らかの理由で、楊貴妃の改葬が出来なかった事を示している。

すなわち、やはり、楊貴妃の遺骸は消失していたと考えるべきであろう。『旧唐書』の「肉も皮も、すでに壊れてなく」という記述は、楊貴妃の遺骸がなかった理由を、それ以外に説明が出来なかったからに違いない。

二　日本における楊貴妃の渡来説

楊貴妃が渡ってきたという伝説は日本にもある。特に、愛知県の熱田神宮に伝わるものと、山口の油谷に伝わるものは有名である。

熱田神宮に楊貴妃の墓があった事は、鎌倉時代の後期に書かれた天台宗の仏教書である『渓嵐拾葉集』にある。[8]

『渓嵐拾葉集　巻六』抜粋

「問。以我国習蓬莱宮方如何

答。唐玄宗帝共楊貴妃至蓬莱宮。其蓬莱宮者。我国今熱田明神是也。此社壇後有五輪塔婆。五輪銘釈迦種子金字書。此塔婆楊貴妃墓也熱田神義見」

訳文

「問い。我が国を以て蓬莱宮とは如何なる方であるか？

答え。　唐の玄宗帝と楊貴妃は共に蓬莱宮に至った。この蓬莱宮とは、我が国の今の熱田明神である。この社の壇の後に五輪の塔婆がある。五輪の銘は、金字で釈迦種子と書かれる。この塔婆が楊貴妃の墓であると熱田神義に見える。」

また、山口の油谷には、楊貴妃の墓と伝わる五輪塔があり、楊貴妃の菩提を弔うために作られたと伝わる釈迦如来像と阿弥陀如来像がある。

この五輪塔は、形状から見て、鎌倉時代の後期から室町時代の初期にかけてのものと考えられるという。また、釈迦如来像は、清涼寺式と呼ばれる様式で、この様式の仏は、鎌倉時代に盛んに作られた。さらに、阿弥陀如来の胎内には、「文永五年八月□日法橋院□」（文永は、鎌倉時代の元寇の頃の年号）の銘があるという。[9]

熱田の伝説も、山口・油谷の伝説も、鎌倉時代にその源流を遡れるのである。

では何故、熱田に楊貴妃の伝説があるのかといえば、熱田が古くから蓬莱と呼ばれていたためらしい。この熱田が蓬莱と呼ばれた事は、尾張守であった大江匡衡の『江吏部集』（寛弘年間1004～1012成立）に初見し、熱田社の所在地を「蓬莱島」（ほうらいじま、よもぎがしま）、熱田社のことを「蓬莱宮」と呼ぶことがあったという。[10]

一方、山口・油谷の伝説は油谷が、熊野の古語読みである熊野（ゆや）と発音する事から来ているらしい。[11] 実際、古来からの能の演目にも「熊野（ゆや）」という題の作品がある。

このように、楊貴妃の渡来伝説は、蓬莱、または、熊野と密接な関わりを持っている。

熊野は徐福の伝説からも古くから蓬莱と同一視されていたと考えられている。そうであるなら、熊野に楊貴妃の渡来伝説があるのが然るべきであろう。

実際、鎌倉時代の初期、藤原頼資は、本宮参詣のついでに湯ノ峰温泉を訪れ、そこでこの湯を「不異驪山温泉」（驪山の温泉に異ならず）と讃えている（『頼資卿記』承元4年（1210）10月8日条）。「驪山の温泉」とは、楊貴妃が玄宗皇帝から賜ったという「華清池」の事であり、頼資は、湯ノ峰温泉を楊貴妃の浸かった湯だと言っているわけだ。

すなわち、この時、熊野は楊貴妃の伝説と結びついていたと想像される。しかし、現在の熊野には、楊貴妃の渡来伝説はない。これは、奇妙な事と言わざるをえない。

三　熊野と西王母信仰

熊野のシンボルが三本足の八咫烏であることは、言うまでもない。

『千字文』という文書がある。これは中国の魏晋南北朝時代の伝説的な能筆家である王義之（303～361）の書を、南北朝時代に活躍した文章家の周興嗣（470?～521）が編纂してつくりあげたと伝わり、一千個の重複しない文字で書かれている。中国では、古くから、児童の文字の手習い書として使われてきた。日本には、李暹という6世紀（西暦500年代）に生存した学者の注釈と共に伝わっている。

その李暹の注釈に、次のようにある。

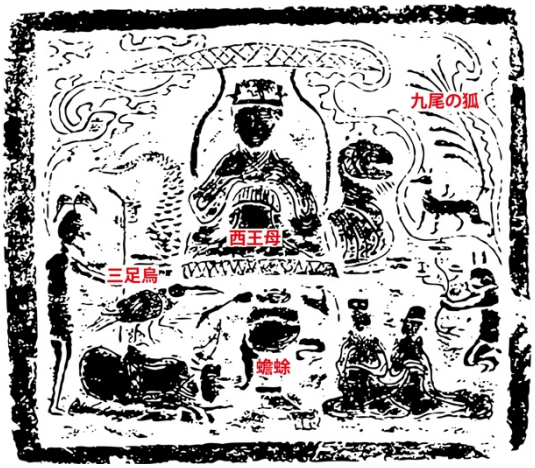
「太陽の中には三本足の烏がいる。それで太陽を金烏と呼ぶ。太陽の色は赤く、扶桑（中国の東方の海中にあるという神木）から登り、咸池（天にある池で、太陽が水浴するという）に入る。[12]」

中国のサイトを調べると、三足烏は、西王母の使いとされているようだ。百度百科の三足烏の項目は、『玄中記』『洞冥記』『准南子・精神篇』など様々な古文書を揚げ、三足烏と太陽、西王母の関係を明記し、さらに、其他信息（追加情報）として次のようにしている。[13]

「三足烏和九尾狐常作為瑞鳥瑞兽列于西王母座旁。」

訳

「三足烏と九尾の狐は常に西王母の傍に列する瑞鳥であり瑞獣である。」



画像① 四川省成都県　新繁清白郷１号墓出土　画像磚西王母像拓本模写　後漢

画像② 四川省成都市新都区出土　西王母画像拓本模写

実際、中国の漢代の西王母を描いた画像石には、しばしば、傍に三足烏が描かれている。（画像①②）

三足烏が西王母の使いとして描かれているのは疑いようがない。

西王母の描かれる傍には、他に、九尾の狐や月に棲むと言う蟾蜍なども描かれている。

振り返って熊野を考えれば、新宮の阿須賀神社や奥熊野の玉置神社には、狐（稲荷）が祀られ、[14]神倉神社には、蟾蜍（ゴトビキ岩）が祀られている。（画像③④⑤）

画像④ 新宮阿須賀神社の摂社の稲荷神

画像⑤ 新宮神倉神社の山頂にあるゴトビキ岩

画像③ 奥熊野玉置神社の摂社　三柱神社に祀られる三狐神

西王母に仕える動物が、熊野にもイメージとして存在しているのである。

西王母に仕える動物が「三足烏」「狐」「蟾蜍」であり、熊野にも同じ動物がイメージされているのであれば、熊野に西王母が祀られていると考えるのが自然ではないだろうか？

四　楊貴妃と西王母

楊貴妃と同時代に生きた李白は、『清平調詞』の中で、楊貴妃の美しさを西王母にたとえている。また、李白の友人であった杜甫は、『奉同郭給事湯東靈湫作』の中で楊貴妃を西王母に模して詩を作っている。さらに李白や杜甫の詩の後継者というべき白居易は、それを発展させ、『長恨歌』の中で楊貴妃を西王母そのものとして描いている。

『長恨歌』には「金闕の西廂、玉扁を叩き転じて小玉をして双成に報ぜしむ」とある。ここにある双成とは、西王母に仕える玉女の董双成のことである。また、「七月七日、長生殿夜半人無く私語の時」とは、漢の武帝が七月七日の夜に西王母と交情を持ったと言う伝説をベースにしていると思われる。（双成や武帝の伝説は中国の六朝時代に書かれた『漢武内伝』に確認できる。）

『長恨歌』では、楊貴妃の夫である玄宗を、唐の皇帝ではなく、漢の皇帝として描いているが、これは、この『長恨歌』が楊貴妃を西王母に、玄宗を武帝にたとえているためであろう。

『枕草子』や『源氏物語』には、『長恨歌』の影響を受けて書かれた部分がある。平安時代の人々が『長恨歌』を深く認知していたことに疑いはない。熊野参詣を行なった平安時代の人々も、楊貴妃を西王母と同一視していたのではなかろうか？

五　五衰殿の女御（熊野の本地）の伝承

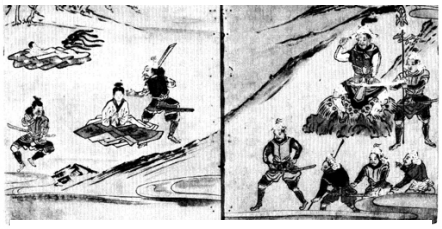
一般に『五衰殿の女御』として知られる伝承がある。これは、『熊野の本地』とも呼ばれ、熊野比丘尼などによって盛んに流布された物語である。現在、和歌山県立博物館には、同様の話が『熊野権現垂迹縁起絵巻』として所蔵されている。『熊野の本地』と呼ばれるように、この伝承が、熊野信仰の起源を指し示す話であることは疑いないであろう。

昔、インドのマカダ国に善財王という王がいた。王には、千人の妃がいたが、ただ一人、五衰殿の女御に夢中になり、五衰殿の女御は懐妊する。残りの九九九人の妃は嫉妬に狂い、騒ぎを起こし、そのため、王は五衰殿の女御を見捨て

ざる負えなくなり、女御は山中で九九九人の妃達に命じられた武士達によって殺される。しかし、女御は死ぬ前に王子を産み落とし、山の獣達によって育てられた王子は、善財王に九九九人の妃の不正を訴え、王は国を捨てることを決意し、王と王子、そして、十一面観音の利益によって復活した五衰殿の女御と共に、熊野に渡り、熊野の神となる。

この話は、王子の登場を除けば、楊貴妃の話と似ている。『長恨歌』で「三千の寵愛、一身にあり」と唄われるように、玄宗皇帝もたくさんの妃があったが、楊貴妃ただ一人に夢中になり、そのため、国が乱れ、楊貴妃を殺さざるをえなくなった。もし、筆者の考えるように楊貴妃が熊野に祀られているとすれば、これは、『五衰殿の女御』の話と酷似している。

画像⑥　和歌山県立博物館所蔵
『熊野権現垂迹縁起絵巻』



画像⑦　九州大学松涛文庫蔵
『熊野の本地』

画像⑧　狩野山雪『長恨歌絵巻』

画像⑥は、和歌山県立博物館所蔵の『熊野権現垂迹縁起絵巻』から五衰殿の女御の処刑される場面である。また、画像⑦は、九州大学松涛文庫蔵の『熊野の本地』からの五衰殿の女御の処刑される場面である。画像⑧も、死を覚悟して座る美しい女性、女性を処刑する武士、それを嘆き悲しむ人々など、画像⑥や画像⑦と同じ題材をモチーフにして描かれている。絵は狩野派の絵師による熟練した筆使いだが一見して、五衰殿の女御の処刑される場面を描いたものと思われるだろう。しかし、この絵は楊貴妃の処刑の場面なのである。これが楊貴妃の処刑の場面だとわかるのは、死刑執行役の武士の手にしているものが、刀ではなく、ロープだということぐらいでしかない。

さらに筆者は、『五衰殿』という言葉にも注目したい。

能に『楊貴妃』[15]という題の演目がある。これは、『長恨歌』を題材とした舞台であるが、ここで楊貴妃は、五衰の後に人界に生まれてきた天女とされている。

『五衰殿の女御』とは、不思議な名称であるが、これが、『楊貴妃』の伝承と重なっていると考えるなら、合点がいくというものではないであろうか。

六　三十三間堂棟木の由来の伝承

熊野楊枝川の辺りに「楊枝薬師」という薬師堂がある。ここに三十三間堂の棟木になったとされる柳の精「お柳」の伝説がある。この伝説は、『祇園女御九重錦』など浄瑠璃や歌舞伎の演目として取り上げられ、江戸時代には広く普及していた物語である。また、三十三間堂では、毎年、一月一四日に『楊枝のお加持』という「楊枝・やなぎ」で、観音さまに祈願した法水を参拝者に注いで、諸病を除くという儀式が行われ、特に頭痛に効くと伝えられ、これは、平安時代からの伝統をもつといい、三十三間堂最重の法要とされている。「お柳」の伝説を、ただの作り話と片付けてよいものではないであろう。

楊枝薬師の楊の字は、楊貴妃と同じである。また、『祇園女御九重錦』を読むならば、この物語は、連理となっていた梛と柳の枝を白河法皇の前世である蓮華坊が切り離すところから始まっている。連理の枝は、『長恨歌』を連想させるものであり、この「お柳」のお話に楊貴妃のイメージがあるのは明確であろう。

『祇園女御九重錦』では、頭痛に苦しんだ白河法皇が熊野権現から啓示を受けるという話になっている。しかし、実際に三十三間堂が建設されたのは後白河法皇の時代であり、この話の頭痛に苦しんだ法皇のモデルは後白河法皇である。また、楊枝川の「お柳」の伝説では、法皇は、因幡堂に籠もった事になっているが、この伝説の舞台は、実際には、東山観音寺、現在の今熊野観音寺であり、後白河法皇は、その本尊である十一面観音を崇敬して頭痛から救われたと、これは今熊野観音寺の縁起にある。[10]

画像⑨　泉涌寺　楊貴妃観音

今熊野観音寺は、現在、皇室と関わりの深い寺院として知られる泉涌寺の一画にある。

また、この泉涌寺には、玄宗皇帝が楊貴妃を偲んで作らせたと伝わる「楊貴妃観音（画像⑨）」がある事でも名高い。「楊貴妃観音」は、建長七年（１２５５）に中国に渡った湛海によって持ち帰られたものだと伝えられている。実際には、「楊貴妃観音」は中国で宋の時代に作られたものだとされるが、いずれにせよ、この泉涌寺が、楊貴妃信仰と結びついているのは疑いない。泉涌寺は、鎌倉時代に月輪大師俊芿によって創られたが、その起源は、平安時代の初期にまで遡るとされ、これが今熊野観音寺であるともされているのである。これを考えるならば、今熊野観音寺もまた楊貴妃信仰と結びついていると考えられるであろう。

今熊野観音寺を崇敬した後白河法皇が、楊貴妃に憧れを抱

いていたことは疑いない。後白河法皇は、藤原信西に命じて長恨歌の絵巻を作らせていた。『平治物語　上巻』には次のようにある。

「信西あまりの勿体なさに、唐の安禄山がおごれる昔を絵にかきて、巻物三巻を作りて、院へまいらせけれども、君はなをげにもと思食たる御事もなく、天気他にことなり。」

藤原信西が長恨歌の絵巻を作ったことは、九条兼実の日記『玉葉』の中にも見られる。

『玉葉』建久二年（１１９１）十一月五日条

「そもそも長恨歌繪に相ひ具して、一紙の反古有り、披きて之を見る處、通憲法師の自筆なり、文章褒むべく、義理悉く顯はる、感歎の餘り、留めんと之を寫す、其の状に云ふ、

唐の玄宗皇帝は近世の賢主なり、然れども其の始め愼みて、其の終り弃つ、泰岳の封禪に有るといえども、蜀都の蒙塵を免ぜず、今數家の唐書、及び唐暦、唐紀、楊妃内傳を引きて、其行事を勘み、畫圖に彰はす、伏して望む、後代の聖帝明王、此圖を披きて、政教の得失を愼み、又厭離穢土之志有らば、必ず此繪に見るべし、福貴常ならず、榮樂夢の如し、之をもって知るべきか、此の圖をもって、永く寶蓮華院に施入す、時に平治元年十一月十五日、彌陀利生の日なり」

すなわち、九条兼実は、長恨歌の絵巻に通憲法師（藤原信西）の書付があるのを見つけて、その内容に感動し、記録として残したのである。しかし、筆者が注目するのは、この長恨歌絵巻が、寶蓮華院、すなわち三十三間堂に収められていたとする記述である。楊枝川の伝説の「お柳」は、三十三間堂の棟木となったとされ、三十三間堂では、今も、「楊枝のお加持」という儀式が続いていることは、先に述べた。

「お柳」の伝説が後白河法皇の熊野信仰と関係し、同時に、後白河法皇が楊貴妃の絵巻を三十三間堂に収めていたという事実と関連している事に疑いはない。これにおいて、後白河法皇の熊野信仰が、同時に、楊貴妃信仰であった事が裏付けられる。

七　亭子院の作った長恨歌屏風の記録

平安時代に、楊貴妃の絵を作ったのは、後白河法皇が初めてではない。先に『源氏物語』が『長恨歌』の影響を受けていることを述べたが、『源氏物語　桐壺の巻』に次のようにあ

る。

「このごろ、明け暮れ御覧ずる長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢、貫之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ、枕言にせさせたまふ」

すなわち、作者である紫式部は、この時代に存在した亭子院の描かせた長恨歌の屏風をモチーフに、『源氏物語』の『桐壺の巻』を書いているのである。この長恨歌の屏風が存在したことは、伊勢の詩『伊勢集』にも確認出来る[17]。

亭子院が宇多法皇の別名であり、この宇多法皇が熊野に参詣した最初の皇族であることは、今更、説明をするまでもないであろう[18]。

宇多法皇が熊野に参詣したのは延喜七年（９０７）、まさに、中国で、大唐帝国が終焉を迎えたその年なのである。

宇多法皇は、まだ天皇であった時代、菅原道真（すがわらのみちざね）を厚遇した事でも知られている。菅原道真が遣唐使の廃止を提言し、同時に、『長恨歌』を作った白居易に強い関心を寄せていたことは、様々な研究者の指摘するところだ[19]。

宇多法皇の時代、『長恨歌』と『楊貴妃』の事が、広く知られ、唐の国の情勢に日本の朝廷が強い関心を抱いていたことは疑いない。唐の国が滅びへと向かい、楊貴妃が、その滅亡の原因となった悪女だとされていた頃、日本では、長恨歌の屏風が作られ、最初の皇族による熊野参詣が行われていたのである。この宇多法皇の熊野参詣が唐の国の終焉と楊貴妃への信仰によるものだったと考えるのは穿ち過ぎであろうか？

結び

『長寛勘文』（１１６３～１１６４）に引用される『熊野権現垂迹縁起』には、熊野権現が中国から渡ってきたことが書かれている[20]。

熊野権現が中国から渡ってきたという伝承について、あまりまともに議論されることがないが、もう少し、検討してもよいのではないだろうか？

熊野本宮大社では、『熊野権現垂迹縁起』に書かれる熊野権現が大斎原（おおゆのはら）に鎮座した時代を崇神天皇の頃（紀元前３０年頃）だとするが、『熊野権現垂迹縁起』が記録された『長寛勘文』は１１００年代の中頃に書かれたものであり、『熊野権現垂迹縁起』の本文中にも具体的な年代は書かれていない。

もう少し、後の時代に起こった出来事を記録していると考えてもよいのではないかと思う。

本論中に示したように、熊野信仰は楊貴妃信仰と結びつい

ており、それは、少なくとも、宇多法皇が熊野に参詣した延喜七年（９０７）にまで遡れる。

楊貴妃が馬嵬の地で姿を消したのは７５６年であるから、そこから１５０年程後の話である。

しかし、これは、今も、楊貴妃の伝説が伝わっている熱田や山口の記録と比べても、比較にならないほど古いものだ。

平安時代の貴族たちの熊野参詣が楊貴妃信仰と結びついて行われていたのは間違いないであろう。では、なぜ現在の熊野には、この楊貴妃信仰が伝わっていないのだろうか？

筆者は、これを、当時の人々が、本当に熊野に楊貴妃が渡来したと信じていたためだと考える。「白村江（はくすきのえ）の戦い」で敗れて以来、日本の朝廷は、唐の国を怖れ、遣唐使として使節を派遣してきた。

楊貴妃は、玄宗皇帝から死刑命令を受けた身であり、言わば、国際犯罪人と言うべき存在である。日本の朝廷には、楊貴妃に同情をする余地はあったが、もし、生存し渡来していたとすれば、決して、その存在を公表することは出来なかったであろう。

そして、楊貴妃が傾国の美女として、かつ、西王母と同一視されていたとすれば、日本の朝廷は、唐の国の国力を減衰させ日本を護ってくれた女神だと感謝し崇敬すると共に、その力を諸刃の剣として恐れたであろう。

このため、熊野の楊貴妃信仰は、秘密にされ、念入りに隠されたものと筆者は考える。

熊野の楊貴妃信仰は、先に述べているように延喜七年（９０７）の宇多法皇の熊野参詣の時には、すでに成立していた。では、この熊野の楊貴妃信仰は、何時、誰によって創られたのであろうか？

熊野の楊貴妃信仰が、楊貴妃の史上の死である７５６年以降に成立したことは疑いない。

しかし、楊貴妃が、本当に渡来していたとしても、それは、生身の楊貴妃であり、信仰の対象ではなかったはずだ。楊貴妃が神格化されるのは、８０６年に白居易が長恨歌を発表した以降であろう。

空海、最澄（さいちょう）、円仁（えんにん）、円珍（えんちん）といった密教の指導者達がキラ星のごとく現れ、海を渡り、日本の神々を仏教の佛に結びつけ神仏が習合されていった時代である。この密教の指導者達が、楊貴妃を、イザナミ、スサノオといった熊野の神々に結び付けられ信仰の対象としていったのだ。

実際、この時代の記録や伝承からも、その様子をうかがい知ることが出来る。

しかし、本論で説明するには、もうページ数が足りない。また、いつか続きを御紹介できる機会を探したい。

補足

本論考は、筆者がａｍａｚｏｎで出版している「龍神楊貴妃伝１楊貴妃渡来は流言じゃすまない」http・://www.amazon.co.jp/dp/4990960408/および、「龍神楊貴妃伝２これこそまさに楊貴妃後伝」https://www.amazon.co.jp/dp/4990960416/の一部を抜粋し、再編したものである。

本論考に興味を持たれた方は、ご一読願いたい。

注

(1) 孔正一（西安小雁塔博物館館長）主編
韓靖（西安剪紙会会長）作
『剪紙図説　武則天　楊貴妃』　中国・三泰出版社 p169

(2) 『日本書紀』　斉明天皇３年（６５７）九月条
同４年（６５８）十月条

(3) 『続日本紀』　大宝元年（７０１）十月八日条

(4) 『続日本紀』　天平神護元年（７６５）十月十三日条

(5) 奥野利雄『ロマンの人・徐福』参考

(6) 三泰都市官報
王双怀教授畅谈杨贵妃的若干问题
http://cul.sanqin.com/2015/0625/121518.shtml

(7) 藤井良雄　陳狲
『兪平伯「『長恨歌』と『長恨歌傳』とが伝える疑義」訳注』
福岡教育大学紀要第５２号

(8) 渡瀬淳子　『熱田の楊貴妃伝説―曽我物語巻二「玄宗皇帝の事」を端緒として―』
日本文学 / 日本文学協会 編 54(12) 2005.12 p.21～29

(9) 加藤蕙『楊貴妃漂着伝説の謎』　自由国民社 P131~132

(10) 伊東宏『秦、徐福伝承の研究（後編）』
『人問と環境―人間環境学研究所研究報告』２（1998）
ISSN 1343－4780

(11) 加藤蕙『楊貴妃漂着伝説の謎』　自由国民社 P164~165

(12) 小川環樹、木田章義注解『千字文』　岩波文庫　P32

(13) 百度百科三足乌　（神话中的神鸟）
https://baike.baidu.com/item/三足乌/1247367

(14) 奥熊野玉置神社や新宮阿須賀神社の狐（稲荷）伝承は、古い起源を持つと推測される。玉置神社の古文書である「玉置山権現縁起」には、「三狐神（みけつかみ）　所謂（いわゆる）　天狐　地狐　人狐ナリ。新宮ニ於（おい）テハ飛鳥（あすか）ニ住ム。則（すなわ）チ漢司符将軍（かんしふ）ノ妻室（さいしつ）ナリ。三大明神ノ母ナリ。権現ノ氏人（うじひと）　千与定ノ子。」とある。

(15) 能『楊貴妃』抜粋
地　「まづ天上の五衰（ごすい）より、須弥（しゅみ）の四州（よしま）乃さまざまに、北洲（ほくしゅう）

の千年つひに朽ちぬ」
シテ「いはんや老少、不定の境」
地　「歎きの中乃、歎きとかや」
「我もそのかみは、上界の諸仙たるが、往昔の因みありて、仮に人界に生まれ来て、楊家の深窓に養はれ、未だ知る人なかりしに、君聞し召されつ、急ぎ召し出し後宮に定め置き給ひ、偕老同穴の語らひも縁盡きぬれば徒に。又この島にただ一人、帰り来りてすむ水乃、あはれはかなき身の露乃、邂逅に逢ひ見たり。静かに語れ憂き昔」

⑯　今熊野観音寺に掲示の縁起抜粋
後白河法皇は本尊十一面観音を深く信仰され霊験によって持病の頭痛が平癒したので、特に「新那智山・今熊野」の称をこの寺におくられました。

⑰　『伊勢集』　和歌５２～６１

⑱　『扶桑略記』延喜七年（９０７）十月二日～二八日条

⑲　潘怡良『菅原道真における白詩の比較表現の受容』（岡山大学大学院社会文化科学研究紀要第３０号）他参照

⑳　『長寛勘文』に書かれる『熊野権現垂迹縁起』
熊野權現御垂跡縁起云。往昔、甲寅年唐乃天台山乃王子信奮跡也。日本國鎮西日子乃山峯雨振給。其躰八角奈留水精乃石高佐三尺六寸奈留仁天天下給布。次五ヶ年乎經天。戊午年、伊豫國乃石鐵乃峯仁渡給。次六年乎經旦。甲子年淡路國乃遊鶴羽乃峰仁渡給。次六箇年過。庚午年三月廿三日紀伊國無漏郡切部山乃西乃海乃北乃岸乃玉那木乃淵農上乃松木本渡給。次五十七年乎過。庚午年三月廿三日熊野新宮乃南農神蔵峯降給。次六十一年後庚午年新宮乃東農阿須加乃社乃北石淵乃谷仁勸請靜奉津留。始結玉家津美御子登申。二宇社也。次十三年乎過旦。壬午年本宮大湯原一位木三本乃末三枚月形仁天天降給。八箇年於經。庚寅農年石多河乃南河内乃住人熊野部千輿定土云犬飼。猪長一丈五尺奈留射。跡追尋旦石多河於上行。犬猪乃跡於聞旦行仁、大湯原行旦。件猪乃一位農木乃本仁死伏世利。宍於取旦食。件木下仁一宿於經旦木農末月乎見付旦問申具。何月虚空於離旦木乃末仁波御坐止申仁。月犬飼仁答仰云。我乎波熊野三所權現止所申。一社乎證誠大菩薩土申。今二枚月乎者兩所權現土奈牟申仰給布云々。